

あるロマンチスト

(小島文八)の生涯 (二)

藤井公明

二 出生とその一族

○ 出生

文八は明治一二年二月一四日、静岡の裏一番町で生まれた。父好問は、陸軍士官学校第一期生で、明治十年少尉試補(工兵科)として西南の役に従軍、戦後少尉に任官された。一二年一月中旬、旧幕府のお蔵奉行であった大越貞五郎の長女幾久と結婚、三月中旬フランス留学を命ぜられて出発した。ベルサイユ工兵第一連隊付となり、ついで

県志太郡西益津村(現在藤枝)が本籍地となっている。しかし文八未亡人の話によれば、好問(三郎)は、安政三年五月九日、杉浦七郎好徳の三男として、本所割下水で生まれたと言う。好問の祖父杉浦元信は、同じ本所割下水生まれの葛飾北斎ひいきの一人だったと言う。小島家に伝えられた杉浦家の過去帳風の系譜には、好問自記の文言が付記されていた。

初代杉浦宇兵衛元信―二代宇兵衛元信―三代七郎好徳

ホンティヌブロウ砲工専門学校に入學した。一五年一月帰朝して、陸軍士官学校教官に任命された。文八はその留学中に生れたのである。

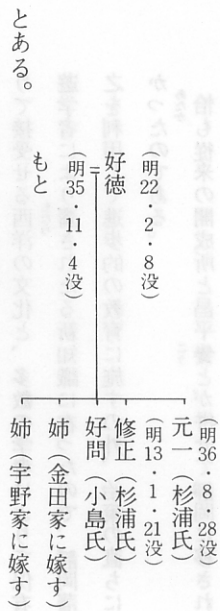
小島好問母方ノ実家ニシテ父七郎杉浦家ノ養子ニシテ、單ニ小島氏ノ姓ヲ襲ギシニ過ギザレバ、殆ド小島家ノ宗家ト觀ルベキモノナリ。

当時の官員録(一一年十月版)を見ると、静岡県は、一等属永峯弥とある。

吉以下の役人は、ほとんど旧幕臣ばかりであった。ちなみに永峯は、これは、後に、好問が守っていた先祖の位牌を、文八に祭らせるた大越の一族であった。そんなこともあって、好問留学中の小島(杉浦)めの文言であった。好問の兄姉は、かね未亡人の話によれば、一家も、静岡裏一番町に住むことになったのであろう。

○ 父方の系譜

故陸軍少將小島好問は、どの人名辞典を見ても、静岡県士族。静岡



とある。

もどが守っていた位牌を、好問がうけ、文八に傳えたのである。杉浦家の菩提寺は、源光寺（墨田区麩橋二ノ五）であった。好問が出世頭だったので、好徳・もとは好問の世話をうけていたのである。

かね未亡人の話によれば、なお明治になって、好問は、奈須玄竹信徳の孫女の生活をも援助していたらしい。そのためか奈須玄竹関係の医学書が、小島家に残っていたので、かね女史が慶應大学の圖書館に寄贈したとのことである。なぜだろうか。私は好問の父、好徳が、奈須信徳の弟だったからだろうと考える。

森鷗外の「小嶋寶素」その十には、嘉永元年一二月七日寶素の死を語り、その末に、

寶素には別に養女二人がある。其一は番外科關本伯英長良の女で、寶素に養はれ、奈須玄竹信徳に適ゆいた。武鑑を檢するに關本氏は「神田松永町」住、奈須氏は「本所石はら」住で、奈須氏も亦官醫の家である。

其二は上に記した杉浦氏とりである。

杉浦氏とりは、小嶋寶素の養女となり、天保八年將軍家齋の第一一

女淺姫、後落飾（天保六年、夫越前守齋承卒去）して松榮院と稱していた方の、奥女中となり、一四年九月二二日に歿した。これは留守居番大久保彌右衛門組與力杉浦彌兵衛勝孔かつらの女であった。

この杉浦彌兵衛の家と、杉浦宇兵衛の家とは同族かと思われるが、今それをたしかめるべきがない。しかし奈須と杉浦は、同じ本所割下

水に住んでいたので、官医奈須信徳の弟七郎好徳が、裕福な町人杉浦宇兵衛の養子になったことは、きわめて自然であったと考えられる。

小嶋寶素の二人の養女、奈須玄竹の妻と、小嶋とりは、姉妹であった。小嶋とりが、未婚のまま、天保一四（一八四三）年に没した時、その位牌を玄竹の妻がひき取って祀まつっていた。その後ある事情で杉浦七郎好徳が、その小嶋とりのゆかりで幕臣となり、その小嶋姓を、安政三（一八五六）年生まれの三郎、後の好問がついたのである。

好問の書いた、「父七郎杉浦家ノ養子ニシテ、單ニ小島氏ノ姓ヲ襲ギシニ過ギザレバ云々」は、ある事情で七郎が小島姓を名のつて幕臣となったことを暗示している。しかも、その小島姓をついだのが、長男や次男ではなく、三男であったことも注目しなければならないだろう。

後明治になって、小嶋三郎は、沼津兵学校に入学した。兵学校入学の資格は幕臣（士族）であった。町人の杉浦姓では入学できなかったのである。杉浦七郎が小島姓を襲いだしたのは、いつかはわからない。しかし、それは徳川家の静岡移封前後のことだろう。そしてこの小島姓

は、小島寶素にゆかりのある小島だったのである。

注① 杉浦宇兵衛は苗字帯刀を許された町人だろうと推定する。嘉永新鑄・安政二

年改正の「本所絵図」には奈須玄竹のほかに、杉浦生兵エヤ杉浦銃之進(下

屋敷)の屋敷がある。この杉浦の一族かも知れないが、町人のためか宇兵衛

の名は見あたらない。

○ 沼津兵学校と好問(三郎)

徳川家達が駿府に移住したのは、明治元年八月であったが、随従した旧幕臣たちの生活は飢餓線上をさまようという悲惨なありさまであった。その間にあつて、平岡丹波・勝安房らの藩の重役たちによつて創立されたのが静岡学問所と沼津兵学校であつた。これは、こんどんとした未来にかけた彼らの夢だつたのである。^{注①}幕末西洋文化と沼津兵学校」によると、

静岡新藩の基をなすがために其衙門を開くや、先づ藩学の制を定めて之が布令を發するの疾風迅雷の如くなりしは、當時世を驚かしたることであつた。徳川氏固と海内の強國たりしも、熟練せる陸軍も養成せる海軍も今は其有にあらざり、軍艦銃砲悉く擧げてこれを朝廷に納めて了つたことである。徳川氏の獨り誇りとすべきものは、其の久しきに亘りて接受せる西洋の文化と、多数の学者によりて保有され、又は海外遊学者により齎されたる新知識に在つたので、静岡藩としては、先づ之を利用して進歩的の教育に施すの外、治策の直ちに出づべき途もなかつたのである。

恰も従来の開成所と昌平黉とが併せて静岡に移されたとも見るべき

素地が、立どころに静岡学問所の設けとなり又た沼津兵学校の創立となつたので、この両方の準備が決して一指彈の能くすべし所に非ざりしを知るべきである。(略)

沼津兵学校は明治元年一二月に創立され、頭取は西周、教授は伴鐵太郎・塚本恒甫・大築保太郎(尚志)・赤松大三郎(則良)・田辺太一・乙骨太郎乙・杉亨二らで、当時の洋学兵学における日本一の学者であり、權威者たちであつた。

徳川家家臣の子弟中、一四才から一八才までの青年を、試験によつて採用し、これを資業生と呼んだ。小島三郎は、明治三年九月二四日及第した第六期資業生であり、時に一六才であつた。

ところが、静岡藩の動靜を見ていた明治新政府は、この教育を新政府の手に移さなければならぬと考へたのである。三年九月二〇日、静岡藩士西周と津田真一郎は上京を命じられ、二八日、西周は兵部省出仕少丞准席、兼学制取調御用掛に任命された。

さらに明治四年一月には、沼津兵学校を中央政府の手に移し、五年五月には幼年学校を、六年八月には士官学校を兵学寮内に設けた。そして同時に、各藩に命じて、後に国軍の士官となるべき青年を推選させたのである。好問(三郎)は、この時静岡藩から選ばれて陸軍兵学寮に入隊したのである。

明治四年二月、詔して薩長土の三藩から兵を徴して御親兵とし、この兵力を背景として四年七月には廢藩置縣を断行した。前記の沼津兵

学校の中央化なども、そのような時の流のなかで断行されたのであった。

注(1) 米山梅吉著昭10・10・8刊 三省堂

○ 陸軍士官学校一期生

陸軍創設者の一人であった大村益次郎は、^{注(1)}奥羽は戊辰の役で大きな損傷を受け、今後五年や十年容易に擡頭する恐れはない。恐るべきは寧ろ西方である。」といった。はたして佐賀の乱、萩の乱、西南の役とつづく内乱は、薩長土肥の旧士族の不平を背景にした兵乱であった。

中央政府を安泰にするためには、従来の旧士族は無用なもの、いやむしろ有害なものにすらなりつつあったのである。新しい日本陸軍の創設が必要だったのである。

明治六年一月一日徴兵令が發布され、その新しい軍隊の幹部養成のために、七年一〇月陸軍士官学校条例が制定され、その訓練はフランス陸軍の方式に統一されることになった。三年に兵学寮が設置されて以来、兵部省はビュラン・プーセブランらのフランス教師を採用していたが、各藩の兵式はさまざまであった。廢藩置県後、五年の春には、フランスからマルクリー中佐以下一六名の士官・下士官が着任していたのである。

初代の陸軍士官学校長には、柳川藩士陸軍少將曾我祐準が、七年一〇月三〇日に任命された。この時、小島好問は、選ばれて第一期士官学校生徒として入学したのである。

^{注(2)}「陸軍士官学校」によると、第一期卒業生は、西南の役の戦病死者三四名を除くと、歩兵科七一名、騎兵科七名、砲兵科二四名、工兵科一五名であった。小島好問は工兵科であった。

当時の日本は、要塞の築城とか、地形の測量などを急務としていた。従って工兵科の学生は、外書講読のための語学力と、自然科学及び数学の優秀なものが選ばれたようである。

当時の工兵科の教授には、旧幕臣小菅智洵がいた。幕末にフランス士官から砲兵学工兵学の指導をうけ、幕臣として会津・函館の戦役に活躍した勇士であった。そのためしばらく罪人として幽閉されていたが、許されて、五年には陸軍兵学大助教に任命された。七年兵学少教授、八年には七等出仕士官学校教官となり、一〇年には少佐に任ぜられた。

小菅智洵は日本陸軍工兵科の創設者であり、近代的陸地測量の開始者でもあった。明治二一年一月八日五七才で没した。その時は陸地測量部長兼工兵会議議員、陸軍工兵大佐であり、正五位勲四等に叙せられた。

小島好問は、語学と数学に抜群の才能をもっていたが、その才をいち早く認めて、ひそかに彼の後継者に育てようとしたのが、この旧幕臣小菅智洵であった。好問が二一年一月旧幕臣大越貞五郎の長女幾久と結婚したこと、また選ばれて同期生中最初の留学生となったこと、帰朝後直ちに陸軍士官学校教官兼参謀本部海防局勤務(工兵中尉)を命ぜられたことなど、やはりこの旧幕臣小菅智洵の影の力が考えられ

る。

注(1) 「陸軍五十年史」 桑本崇明著 昭18・3・10刊 鱗書房

注(2) 山崎正男編 昭45・9・15刊 秋元書房

○ 文八の母 幾久

文八の母幾久は、もとお藏奉行大越貞五郎の長女で、当時兄大越成徳は、英国公使館の書記生としてロンドンにいた。幾久は日本最初の女学校、開拓使女学校の卒業生であった。

注(1) 「明治文化史3教育道徳編」によると、

明治初年の官立女学校には、なお一つ開拓使仮学校の女学校がある。

一八七一年(明治四年)九月、北海道開拓長官東久世通禧は、北海道

開拓の人材を養成するために学校の設立を請願、続いて十月には、女

学校の設立と女子の海外留学を上奏して、いずれも許され、一八七二

年(明治五年)九月、東京芝増上寺内の開拓使仮学校(同年三月設立)

に女学校を併置した。学科は漢字・習字・裁縫とし、卒業後は、男子

部卒業生とともに北海道に永住して開拓のことに従う女子を養成する

のを目的とした。一八七五年(明治八年)七月、開拓使仮学校が札幌

学校と改称し、札幌に移転するとともに同地に移ったが、翌一八七六

年(明治九年)五月には廃校となった。

とあるが、この札幌女学校の卒業生であった。

当時の北海道は、榎本武揚らの幕臣が、北海道開拓を請願して箱函にたてこもったが、敗北した直後の空白時代であった。東京を追拂われたが静岡移住もむつかしい時代だったので、旧幕臣たちは真剣にな

って北海道移住を考えていた時代であった。

大越貞五郎は、もとお藏奉行であり、川路聖謨の後妻、さと子の兄であった。なお幾久の母は、聖謨の養女だったので、幾久たちは聖謨を外祖父と呼んでいた。賢夫人だったさと子の伝記は、川路太郎(寛堂)の書いた、「川路聖謨之生涯」に付記されている。

さと子は文化元年(一八〇四)に生れ、天保九年(一八三八)に嫁し、夫聖謨の死(一八六八)後、髪を剃て松操と号し、公的交わりをたち、歌詠をもって晩年を楽しみにした。明治一七年一〇月二日、胃癌を病んで死んだ。享年八二才であった。

注(1) 第一章第一節明治初期の女学校 昭30・6・15 洋々社

注(2) 元版明36・10刊 複製昭45・9・10 世界文庫

○ 川路聖謨

川路聖謨夫妻は、幾久たちにとって、おじいさん・おばあさんであり、幾久たちの人間形成、ひいては文八の人間形成に大きな影響を与えた人たちであった。

川路聖謨は、幕末第一級の名臣であった。享和元年(一八〇一)、豊後日田代官所の手付手代甲州浪人内藤吉兵衛の二男として生まれ、幼名を弥吉といった。文化九年(一八一二)、小普請組だった小祿の幕臣川路三左衛門の養子となったが、抜群の才能によって出世をつづけ、老中阿部正弘の信任を得て、勘定奉行となり、天下の諸候・各藩の俊才たちから望みを托された人材であった。

嘉永六年(一八五三)、天下の安危を一身に背負って、長崎で露使

プチャーチンと接渉した話は有名である。その時ロシア側の通釈として活躍したゴンチャロフの「日本渡航記」^{注1)}にも、川路の賢明さが、いきいきと書かれている。

翌年プチャーチンは、再び下田にやってきて和親条約の締結をせまった。日米和親条約締結の直後だったので、長崎の約束もあつたので、やむを得ず下田和親条約を結んだ。安政元年（一八五四）であつた。

しかし、この和親条約で注目すべきは、北方領土問題であつた。聖謨は、クナジリ・エトロフ島以南が日本固有の領土であること、カラフト島が両国共有の島であることを、プチャーチンに確認させたのであつた。江田島の旧海軍兵学校には、安政年間アメリカで出版された日本近辺の地図が所蔵されているが、それには、はつきりとクナジリ・エトロフ島以南が、日本固有の領土であることが銘記されている。つまりこの時、それが国際的に承認されたことを意味しているのである。この時の日本の国力を考えた時、外交官としての聖謨の偉大さが、はつきりと示されているのである。

しかしその後、安政五年二月老中堀田正睦と上京して、安政の日米修交条約の勅許を得ようとして懸命の努力をしたが許されなかつた。さらに、当時まき起つていた將軍継嗣問題にさいし、日本の安危を考へて、年長賢明の一橋慶喜を推して失敗した。そのため、安政六年（一八五九）、井伊大老によつて、御役御免、隠居蟄居を命ぜられた。

以後聖謨は、政界の第一線をしりぞいた。文久三年（一八六三）特にめされて、半年ほど外国奉行に列せられて、国難に當つたが、間も

なく再び隠居生活にはいつた。しかしその間も、一橋慶喜・松平慶永など要路の人たちから、しきりに大事に関して意見を求められていたようである。

慶應二年二月一二月、聖謨は卒中で倒れ、三年（一八六七）一〇月、慶喜は將軍職を返上した。聖謨は天皇を奉じて、徳川將軍のもとに、日本を文明開化の方向に統一しようと考へていたのである。孝明天皇御在世中は、ほぼそれが成功しつつあつた。しかるに今、討幕派の策動におしきられ、慶應四年正月、鳥羽伏見の戦に敗れ、將軍は賊軍の汚名をきせられたまま江戸城に帰つてきたのである。

慶應四年三月一四日、江戸城引渡しを明日ときいて、勝海舟らに後事を託する遺書を残して聖謨は自決した。

注2) 聖謨これを引き、只潜然たり。然して其翌十五日午前、用事によせ妻をして己れの側を去らしめしが、暫くして聖謨の臥房の方にあたり銃聲のあるをき、妻は驚て馳せ戻りに、聖謨は拳銃もて己れの喉部を射撃し、既に絶命してをれり。由て家族は近親を集め、其遺骸を檢せしに、腹部は短刀もて淺くこれを横断してあれり。是れ全く古への武士の式例に準じて行ひたるまでにて、其死を確かに遂げむがため、銃丸を放射せしこと、察せらる。且夫れ當時は猶ほ半身不随なりしゆゑ、斯る自裁も單に右手のみも行ひしこと、しるなり。時に聖謨年六十有八、編者こ、に到り、覚えず涙を灑ひてこれを記しぬ。

とある。太郎（寛堂）は、当時徳川昭武の供をしてフランス留学中だつたので、これを伝えたのは夫人さと子であつた。

文明開化を国是とした明治政府の要人たちは皆、聖護の偉大さと功績をよく知っていた。しかし、明治政府の権力を握った薩長派の人たちは、佐幕派もまた勤皇の志士であったことをあいまいにして、彼らのみの勤皇精神を強調したのである。彼らの作った歴史政策^{注3)}によって、明治二四年一月一七日には一五二名、三一年七月四日には一五二名、三五年一月八日には一五九名と大量の贈位が断行されたのである。かくて無名に等しかった攘夷派の志士たちの表彰がはなばなしく行われたのである。そしてそれに反して、日本の近代のために、文明開化の道をきりひらいた幕府側の代表者川路聖謨に、贈従四位の表彰が行われたのは、ようやく大正元年一月一九日であった。これは政治がつくったひずみであった。

注1) 岩波文庫

注2) 「川路聖謨之生涯」

注3) 「転向——明治維新と幕臣」 しまね・きよし著 一九六九年 三一書房

○ 大越貞五郎の子女（かね未亡人談）

成徳
幾久子（小島好問妻）
秀子（藤堂紫朗妻）
きわ子（杉文三妻）
貞五郎
慎次郎（根津欽次郎養子）

○ 大越成徳

成徳の名は、一〇年二月刊の「官員録」に、英国公使館つき書記一等見習として登場する。おそらく東京開成学校をでも卒業して赴任したのであろう。一二年には書記生に昇任して、しばらく英国にいた。その間に、彼は英国の女性と結婚した。父はイタリーから亡命した志士で、母は英国人であった。

その後の外交官としての経路は、こまかくは知らないが、日清戦争前には上海領事をつとめていた。公使大島圭介らとともに、時の外務大臣陸奥宗光の信任厚く、その手足となって活躍したようである。三人とも旧幕臣系の人たちであった。

^{注1)}「歴代顯官録」によると、明治三〇年五月ブラジルにはじめて公使館が置かれ、大越成徳は、三二年三月一三日に二代目公使に任命された。また三五年四月三〇日アルゼンチンにはじめて公使館が置かれ、成徳はその初代公使をも兼任している。出自が東京士族となっているから、大越家は静岡には随従しなかったのである。成徳ははじめて開かれた両国との親善向上に努力したわけであるが、やがてその努力が実って、四一年には、はじめて日本の集団移民が、サンパウロ州に渡航するようになったのである。

しかし、これより先三七年一月、いそぎ本国に召喚された。日露

戦争中、英国における外債募集のためであった。

三七年二月一〇日対露宣戦の詔勅が漢発されるや、元老伊藤博文は、国情を調査し、任期満ちて帰朝するや、直ちに東京外国語学校教授とただちに、末松謙澄を英国に、金子堅太郎を米国に、それぞれ特使として派遣した。これは外交と外債募集のためであった。末松は伊藤の娘むこで、三三年一〇月第四次伊藤内閣が成立した時の内相であり、金子は法相であった。ともに伊藤の信任厚い人材であった。

明治一一年末松が、一等書記見習としてロンドンに赴任した時、一年先輩の同僚として大越がいた。二人はその時以来の知友であった。末松が去った後も、大越はロンドンに残り彼の妻は英国人であった。末松はそれをよく知っていた。だから末松の要請によって彼は急にロンドンに呼ばれ、外債募集の重要任務についたのである。

注① 明治百年史叢書 昭42・5・20刊 原書房

○ 藤堂紫朗

藤堂紫朗については、^{注①}「東亜先覚志士記傳下」や、かね未亡人の話などを綜合して書くことにする。彼は旧江州藩士藤堂莊の次男で、安政五年（一八五九）二月四日に生れた。小島好問より二才年下で、大越貞五郎の次女秀子の夫である。明治八年旧外国語学校露語科に入学。二葉亭四迷らの先生になった。

旧外国語学校廃止後は、ウラジオに渡航してロシア語を研修するかわら、ロシアの実情を調査し、東亜の形勢を観察した。帰朝後は陸軍大学校でロシア語を教えていた。

陸奥外務大臣の時、オデッサ駐在領事を命ぜられ、さらにロシアの

国情を調査し、任期満ちて帰朝するや、直ちに東京外国語学校教授となり、幾多の有為な青年を養成した。その頃、文八もまた外語佛語科に学んでいたのである。

日露戦役が起るや、直ちに浮虜情報局顧問となり、対露戦略の重要任務に参画し、大いに功労があった。やがて文八が情報局勤務についても、この叔父の関係からであろう。

陸軍教科書露語教程及び露語辞典の編集など、日本におけるロシア語研究の先覚者であった。明治四二年七月一八日、五二才で没した。

注① 明治百年史叢書 黒龍會編 昭41・6・20刊 原書房

○ 杉亨二

貞五郎の三女きわ子が嫁した杉文三は、有名な洋学者杉亨二の子で、高山樗牛の妻里子の兄であった。亨二の名は、すでに小島三郎が沼津兵学校に入学した時の先生の一人であったことは前に書いた。いまその略伝を^{注①}「大正過去帳」によって紹介しよう。

帝国学士院会員、法学博士、正五位勲三等。久しく病氣療養中東京小石川指ヶ谷の自宅で大正六年二月四日午後四時逝去。九〇才。従四位追贈。

静岡県士族、長崎に生まる。幼名純道。祖父杉敬輔に育てらる。夙^{はや}に西洋文明の輸入に努め、統計学を研究し本邦統計学の開祖。幕府時代に伯爵勝安房と親密たり。阿部伊勢守に重用され幕府の開成所教官

を勤む。伊勢守没後野に下る。明治四年太政官に召され政表課の課員となる。この政表課こそ中央統計機関の始まりで、一五年統計院となり一八年統計局となる。この時退官今日に及ぶ。

注(1) 昭48・5・15 東京美術発行

○ 根津欽次郎

貞五郎の次男慎次郎は根津欽次郎の養子となった。欽次郎の妻が、貞五郎の妹だったからである。

根津欽次郎は、勝海舟の「海軍歴史」^{注1)}(1)の海軍歴史巻の五「海軍伝習下」を見ると、「同年(安政四年)九月江戸より新生徒下り来る。」に、小普請組小笠原弥八郎組根津欽次郎の名が見える。また海軍歴史巻之七「咸臨艦米國渡航上」には教授方手伝として赤松大三郎とともに、その名をつらねている。つまり海舟とともに、太平洋を渡った、最初の日本人の一人であった。「米國渡航下」には、万延元年(一八六〇)一二月一日咸臨丸乗員に賞賜があったことが書かれていて、根津欽次郎は「銀三十枚時服二」を「亜墨利加国へ罷り越し骨折り候に付これを下さる。」とあり、さらに特賞として「亜米利加国へ御軍艦差遣わされ候義は、御国初以来初めての事に候処、数千里の航海しこお滞りなく御用相勤め、格別骨折り候に付き別段御褒美のためこれを下さる。」とあって別に銀二十枚をもらっている。

海軍歴史巻之二「小笠原島開拓下」に、朝陽鑑を再度小笠原に派遣したことが書いてある。艦長は伴鉄太郎で、この人は後に沼津兵学

校の教官になって、小島好問の先生になった。乗組員の筆頭は運用係の根津欽次郎であった。文久二年(一八六二)六月十八日に発令された。

これより先、幕府は、文久元年九月、軍艦を出して小笠原島を調査した。英米その他の外国人が多数たどりついて、領有権がゆらぎはじめていたのである。文久二年の場合は、八丈島の島人を小笠原に移住させて、日本の領有権を確保するためであった。

慶応四年(一八六八)三月二十八日、軍艦富士・翔鶴・朝陽・観光の四艘は、官軍に引渡された。それ以外の軍艦は、海軍副総裁榎本武揚の支配下におかれたのである。そのためか、後に五稜郭にたてこもった人名録中に、伴鉄太郎や、根津欽次郎の名は見あたらない。

その後の根津欽次郎の進退については、残念ながら私の調査は及ばなかった。

注(1) 勝海舟全集12 一九七二・二・一五 勁草書房

三 青少年時代

○ 同世帯の人々

文八より二年おくられて、明治一五年一月一五日に生まれた川田順は、その自叙伝とも見なされる「葵の女」の中で、

ボクは自分の恋愛に関して昨年夏（昭和二二年）以来たくさんの歌を作った。「作った」と言つては誤りで、自然と歌はざるを得なかつた。

又この拙稿を初めとして今後も事につき折に触れて散文を書くかも知れない。自分への記念の手記である。ところが、ボクの歌にしても文にしても、この年齢で^{注(2)}ありながら、どうしても浪漫の匂を抹消しきれ

ない。すなわち寫實に徹底し得ない。他人が見たならば、もつと赤裸々に寫實すべきところを敢へて詩化し昇華しようとする偽りがあるかも知れない。けれどもそれはボクとしては決して偽りではないのである。

おほまかにいふと、明治時代に生れた人間は一生浪漫の微かな余薫を身につけて歩く。浪漫は或は言葉を換へて「夢」は彼等の微かな余一部分となつてしまつてゐるのだ。それは文学者に限らず、政治家でも、宗教家でも、商人でも、軍人でも、誰れでも、

と書いている。

「葵の女」は、一五代將軍徳川慶喜の令嬢を指している。順の青年時代に恋愛の対象となつた女性である。順は「おほまかにいふと、明治時代に生れた人間は一生浪漫の微かな余薫を身につけて歩く」と言つているが、厳密に言えば、ボクらと同世代の人間はと言つた方が、より適切かも知れない。順の学友だつた小山内薫や武林無想庵などは、

その代表者である。華嚴の滝に投水自殺した藤村操もその一人である。当時彼らの教師だつた夏目漱石は、後に、小説「心」の中の主人公たちとして、彼らの人間像を描いている。明治三三年頃、つまり二〇世紀初頭に、その青年期を迎えた人たちである。

小島文八もこの世代の青年であつた。彼らは前面には、海の彼方からおしよせる新思潮の渦をながめ、後方には幕末以来激動をつづけてやまない家門の影を背負つていた。家門の影は宿命のように、彼らの運命につきまといつていたのである。そして、そこから彼らの倫理観も生まれていたのである。

注(1) 「葵の女」中の「老いらくの時代」・安樂書院・四・昭三四・八・二〇刊

講談社

注(2) 昭三年記、作者数えの六六才

○ 「生命の廢墟」

私がこの「小島文八の生涯」を写こうと思つたのは、若くして文学を志し、しかもその夢を果し得なかつたこの人の生涯が、従來の明治大正文壇史ではのぞき見ることでできなかつた、その時代の大きな流れの半面をありありと示していると思つたからである。

前にも紹介したように、文八には未刊の自叙伝「生命の廢墟」がある。彼は大正七年一月南洋から帰朝した。その後知人とともに、ゴム会社を設立したが、第一次世界大戦後の世界的パニックの波にさらわれて、ゴムの大暴落にあい失敗した。大正九年の暮、私財をなげうち、家屋敷を売つて房州に渡つた。これは、その時書いた自叙伝であ

った。

(前略) 当年の感想に続いて、更に現在の心境に及ぼう。僕は此拙き全篇の稿を、去月の六日から始めて十二月の十三日までくだらぬことを書くと思ひながらもつづけて来た。

十二月十四日は、僕が此世にはじめて光りを見た誕生日なので、此日を記念として新しき生活改善を試みようとして預期していた。なんと云ふ自力根性だろふ。絶対他力の信仰に没入するものになんの改善があるろふ。一切が大悲の顕現である以上、すべてはあるがままであるべきではないか。刻々の生刻々の死、刻々の死刻々の生、を味ひつつあるものに、どうして明日があるろふ。念々臨終の一生には、刹那がこれからである。

果して此誕生日は改善どころか、最も甚だしい無明長夜のおどりを見せつけられた一日であった。それから十日間ほど、毎日僕は混沌とした無意義な日暮らしをつづけて漸く今日に到った。然かし此間に自分が痛切に触れた心の醜ひ姿や、生を呪はんとするまでに行きつづつたような暗黒の底から、僕はかへつてこれまでに知られなかつたほどの如来大慈悲の御光をかうむることが出来、雑業雑修の虚假の自力作善が如何に無価値にして力なきものであるかと云ふことを身に沁て感得せしめられた。

(中略)

今僕は人主の一角に立つて、生命の廢墟を眺めて居る。

とあるが、これは「生命の廢墟」の第一章・一念帰命の一節である。次に「生命の廢墟」の目次をかかげておこう。

はしがき

第一章 一念帰命

第二章 濱辺に来て

第三章 南洋から

第四章 長江の畔

第五章 赤道を越へて

第六章 歎を持つ男

第七章 絶海の離れ島

第八章 日露の頃

附記 亡友尾花繁太郎君

となつて居る。これは大正九年の年末を起点として過去にさかのぼると言う叙述法で、新らしい構成の回顧記である。文学的意図をもつ構成で、他日自費出版の意図をもつていたのかも知れない。作者は誕生日を迎えて満四一才になつていた。

この「生命の廢墟」の一節に、
僕の宗教的萌芽は、幼時より無意識の中にはぐくまれて居つたように感ずるが、それは敬虔なる祖母が、朝夕に香華を手向けて一心専念に神佛に祈願するのを、絶えず目撃して居つたのにも基因すると、一つは自分の先天内容に深く這般の清操が固執して居つたようでもある。これ
で子供の時、家人たちがよく和尚々と呼んだと云うことである。
とある。文八の性格の一端がうかがわれる。

注① 「生命の廢墟」三五〇頁

○父小島好問の進退(ある時期)

幕末の戦乱で、幕府側の人たちは、多くの一族や知人を失つた。また明治になつても、静岡移封のために、直参なるが故に味わつた数々の

はじめな生活があった。祖母たちの心にも、その大きな陰影がやどつていたのである。

しかし明治一五年には、父好問がフランスから帰朝し、陸軍士官学校教官となり、兼ねて陸軍参謀本部勤務となったのである。少壮有為の青年将校であった。だが明治十八年、ドイツ人メツケルが陸軍大学の教官として来朝した頃から、好問の前途に多少影がさしはじめた。今まですべてフランス式であった陸軍の訓練が、ドイツ式に変更されるようになったからである。

明治二十一年、月曜会解散事件に触れて、一一月、好問は、態本師団に左遷された。文八は数えの十才であった。^注「日本軍閥の興亡」(1)によると

山^{やまがた}県の勢力が陸軍部内にしだいに伸びるにしたがい、この反対勢力も、またしだいに醗^{えんじや}酵されることは、人間界の自然的な社会現象である。

明治十三年の初めごろ、陸軍士官学校第一期生および第二期生の有志が、ときどき小集して兵学を研究し、実験を談じ合ううちに、十四年三月にこれを月曜会という研究団体に組織化した。十七年十一月になると、陸軍少将堀江芳介が推されて会長となり、三浦梧楼、鳥尾小彌太、谷干城、曾我祐準の四中将が顧問格となったので、新進有為の将校は陸統として入会、桂太郎、奥保鞏、長谷川好道、児玉源太郎、小川又次、立見尚文、寺内正毅、井上光、大久保春野、上田有沢、浅田信興、中村覚、早川怡与造(田村)、東条英教、井口省吾といった

後年大将、中将となって名をなした諸将が会員となったので、同会の陸軍部内の勢力は、しだいに増大されていった。

堀江芳介は山県の後輩の長藩の出身、国司順正、滋野清彦らの長州同僚に伍して進み、ほんとうは長閥の本流的系列にはいるべき優秀な人物であったが、山県とはどういふものか相容れないものがあつた。月曜会会長就任の当時は、陸軍戸山学校長の職にあつたもので、それが山県に対立する三浦、鳥尾、谷、曾我という危険人物を、月曜会の顧問に推したことが、問題をつくる導火線となつた。

(中略)

会の性質がこういう変化をするにつれて、会員中にも動搖をきたし、桂、児玉、早川、寺内といった山県系の会員は続々と退会したので、残つた会員は、いよいよ反山県態度に硬化し、山県閥対反山県閥の姿をクッキリ現わしたのである。

そこで当局の手は、まず会長の堀江芳介の弾圧に伸び、十八年五月には、戸山学校長から近衛歩兵第一旅団長に転出させ、翌年七月十日にはさらに遠く金沢の歩兵第六旅団長に転出させたが、その赴任するかしなない八月十八日には、早くもこれを免じてしまった。(以下略)こうして明治二〇年ごろからは、月曜会对山県派の対立はますます激しくなつて、会員中の軟派とは脱会するものもかなり出たようである。二十一年には、会員中の硬派と目されるものが処分され、左遷される。小島好問もその一人であつた。二十一年二月二十五日には、鳥尾三浦、曾我、堀江の四将軍は予備役に編入されてしまった。

昭治二十一年一月、工兵大尉小島好問は、陸軍参謀本部第二局第一課つきを免ぜられ、工兵第六大隊第三中隊長に補せられた。それは熊本師団であった。この時以来彼は栄光の座から追放されたのである。文八は数えの一〇才、小学校時代であった。翌年三月春休みを待って転校、一人淋しく田原坂を越えて、父母の住む熊本にたどりついたと言う。

明治二十四年九月九日、好問は、工兵第二方面署員に補せられた。任務は由良要塞の構築であった。文八も大阪偕行社尋常高等小学校に転校した。

明治二十六年二月一八日、好問は、工兵方面本署員に補せられて東京に帰った。間もなく日清戦争が起った。二十七年二月一日第一軍兵站電信提理に任ぜられ、一二月二日工兵少佐に昇進した。一六年二月二八日大尉に任命されてから一一年目であった。

二十八年五月二八日第一軍が凱戦。一月八日工兵方面本署々員兼工兵会議々員に補せられた。参謀本部直属である。

二十九年四月一日、好問は、工兵第三方面呉支署長となり呉に、三〇年八月七日には、工兵第一方面横須賀支署長となつて横須賀に帰った。三〇年九月九日、勅令により築城部條例が制定され、初代の本部長は、工兵大佐石本新六が任命された。石本は陸軍士官学校の同期生であった。

三十二年一月一日、好問は工兵中佐に任ぜられたが、これより先、石本新六は、既に陸軍少将に任ぜられていた。三十二年八月二日、工兵

中佐小島好問が、築城本部々員に補せられて東京に帰った時、その本部長は、やはり石本少将であった。学究的な築城の権威者小島好問が、現場にあつて、日進月歩の勢で進歩する欧米の築城資材や築城学と対決している間に、軍政的才能によって、石本新六は昇進をつづけていたのである。

注(1) 松下芳男著、昭和42・10・10 人物往来社発行

○ 文八の中学校時代

明治二十七年四月、文八は四谷にあつた塩谷吟策の明治義会中学校二年に編入された。二十九年四月、父が呉に転任するようになった頃から、漢学者塩谷青山の塾にあずけられて、そこから中学校に通うようになった。その頃のことは、

昔中学に学んで居った頃、数多くの濟輩せいはいの中に、冬でも単衣ひとえに薄い綿入れ羽織を重ね、竹の皮草履ぞうりで登校して来る少年が居った。彼は或地方から転校して来たもので、平素深沈寡黙、常に他の仲間から離群して、一隅に睨眼にががんを光らしつつ、特に其明晰めいせきなる頭脳を持つて、他の同輩と撰を異にして見受けられた。

丁度其頃、僕は小石川の某漢学塾に寄宿して居ったが、或日曜日の朝、皆外出してから一人で塾の道場に寝ころびつつ読書して居るところへ、ひよつと此の一風変つた少年が訪ねて来た。

二人は、小春の日光に浴しながら、焼芋を喰ひつつ、それからそれへと放談快談をつづけてゆくうち、此少年の雄弁滔々として気焰万丈なるに、僕は、平素寡黙の彼に対して、以外の驚きを以て耳を傾けた。

其頃生意気にも独逸社会党の記事か何にかを見て、あの熱烈なるフェルチナンド・ラザールに共鳴し、大に彼の人格を称へて、僕も相應に柄になく壯語を壇まました。

これが縁となつて、彼との間は断金の交りを結ぶに到つた。僕とちがつて総てが理路明確に、思想緻密、常識にも富んで、冷静なる頭腦を有して居る。それで居て中心には燃ゆるような情緒を蔵して、血も熱も溢れて居つた。此少年こそ親友のMである。

免角感情に鋭くして、ロマンチックの傾向を多分に有して居つた僕と、萬事が堅実で容易に心を動さないMと、此二つの異つた性格の間には、ともに共通する熱情と愛とを有つて居つた。(以下略)

とある。Mとは岡山出身の三吉利三郎である。これは中学校五年の秋の話である。その明治三〇年には、片山潜著の「労働者の良友 喇撒傳」が出版されていた。

また、前にも引用したが、

中学生の頃、北村透谷の心霊的微光に有限の無価値を痛感し、湖処子の十二文豪ウオーゾオースにライダルの詩聖が汎神の靈感の詩趣を感得したこともあるが、其後松村介石氏のデビニチーと内村鑑三氏の時勢の觀察には、或種の宗教的共鳴を覚へ、爾来基督教的傾向に加味するに、カーライルの神秘的熱烈の思想を以てした。(略)

とある。北村透谷の「内部生命論」は三六年五月の文学界に発表されたが、彼の死後、二七年十月には「透谷集」が出版されていた。また湖処子の「ラルズラルス」は、二六年十月、民友社から出版されている。

た。松村介石のデビニチーは、三〇年警醒社から出版された「社会改良家列傳」を読んだのであろう。また内村鑑三は、旬刊の「東京独立雑誌」を、三二年六月から三三年六月まで発行していた。だから内村の影響をうけたのはむしろ東京外国語学校時代であろう。

中学校にはいると日清戦争がはじまり父は出陣した。戦争が終ると父母は彼を塩谷青山塾にあずけたまま呉に転任した。多感な少年は、現実の薩長閥政治を批判的目で見つめるようになり、同時に、いつのまにか神秘的宗教を求める青年にと生長してきたのである。

注(1) 「生命の廢墟」二七二頁

注(2) 「生命の廢墟」三五一頁

○ 東京外国語学校時代

三二年九月東京外国語学校フランス語科に入学。まもなくシャトウブリアンにあこがれ、後に「哀調」の訳者になつたことは、前章でくわしくのべたとおりである。

がなお、その時代の彼については、

中学を出てから、彼(M)は私学の法律にゆき、僕は官学の語学に就いたが、其頃東京の官私学を通じ、或有志の結社が成立し、当時政界一流の名士たるSを中心にして、一種の精神的社会運動を起すことになつた。彼も僕も其會に關係して幹部の衝に当り、共に活動を試みるに到つたが、何時も衆議の席で堂々と所論を発表し、主張を吐いて憶せなかつた、彼の態度は、実に元氣あるものであつた。

僕は内面的に、彼は外面的に、各其向ふところを一にして、歩調を

揃へつつ親しき交りを一層深くして行くうち、或日其結社の發會式に、ヤが旅順・大連を、四月三日イギリスが威海衛をと、つぎつぎに租借九州から上京して東大の文科に学びつつあるYといふ青年と縁に触れ、して、清国を分断しようとした時、島田は五月三〇日第一二帝国議會爾来三人は鼎の如く離れがたき間柄に結び合った。(つづく)

とある。文中のSとは島田三郎、Yとは吉丸一昌であつた。

島田は旧姓鈴木三郎。嘉永五年(一八五二)十一月江戸に生まれた。小島好問とともに沼津兵学校に学んだが、兵学校廃止後は大学南校に学んだ。元老院書記官、文部省大書記官などを歴任したが、後神奈川県会議員、同議長ともなつた。横浜毎日新聞主筆、東京毎日新聞社長、二三年一月第一回帝国議會が開かれるや神奈川県第一区選出の代議士として活躍した。

島田三郎全集第一巻は、彼の議會演説集であるが、その巻頭に書かれた石川安次郎の序文の一節に、

……明治三二年憲政本党を脱退せられて以来、独立独歩の地位を占め、議會の壇上から、政府と諸政党の缺點を痛罵せられた時、議會は全く先生一人の議會の如くに見えた。其の後海軍シーメンス事件の時、先生の雄辯は、山本内閣を倒し、普通選挙に関する演説は、原内閣をして採て以て議會解散の重なる理由に加えしめた。……

とあるように、正義を愛する孤高の政治家として活躍した人であつた。島田は、明治三〇年四月三日、嶋山和夫、田口卯吉らとはかつて、「社会問題研究会」を作つた。また三〇年七月五日、高野房太郎らによつて「労働組合期成會」が作られた時には、彼はその強力な協力者になつてゐる。三一年一月六日ドイツが膠州灣を、三月二四日にロシ

ヤが旅順・大連を、四月三日イギリスが威海衛をと、つぎつぎに租借九州から上京して東大の文科に学びつつあるYといふ青年と縁に触れ、して、清国を分断しようとした時、島田は五月三〇日第一二帝国議會に上奏案を提出した。東洋の平和を願つて、泣いて遼東半島を返還した日本国民の意図が、いま欧州列強によつてふみにじられようとしてゐることを嘆いて、伊藤内閣の軟弱外交を弾劾したものであつた。

その頃、清国人の間にも、強い危機感を抱く青年たちが多く出た。若い光緒帝は、広東出身の青年官僚康有為の説を採り、戊戌(明治三一年)の変法を断行して、政治の改革を断行しようとした。しかし、それは西太后を中心とする旧守派に反対せられ、彼らは哀世凱の武力によつて、改革派の指導者を捕え、八月には光緒帝を幽閉してしまつた。

康有為は、あやふく難をのがれて日本に亡命した。しかしこの頃から清国における排外思想は急激にたかまり、やがて明治三三年の義和團事件にまで發展するのであつた。

前述したように、「生命の廢墟」に、島田三郎らを中心にして、学生たちが結社を作り、一種の精神的社會運動を起すようになつたとあるのは、このような内外の社會情勢を反映したものであり、それは康有為亡命の前後からであろう。

当時文八は、新大陸の原始自然と原住民のもつ素外な愛を讚美したシャトウブリアンの原作、アタラ・ルネーに心を動していた。彼によつて同文の國清國が、歐洲列強により、分割され殖民地化されようとする現状を、坐視するにしのびなかつたのである。

(つづき) Yは後年東京音楽学校に教鞭をとり、音律歌謡の学者として世間から認められるに到ったが、彼のことは序を逐ふて叙述しよふ。Mは研究を了^おへて後、其国の先輩なる有名なるIと云ふ政客の庇護を受け米国に渡航した。

MとYと僕とは学窓に居るうち、三人会合してはよく飲みよく語つた。僕が麻布隊に入宮後、彼等は僕の祝賀と慰安を兼ね、或日曜日、雪の降る朝、わざわざ僕を迎へて、赤坂に於ける第一流の某旗亭に、書生に似合はぬ豪遊を試みたこともあつた。快活にして機鋒峻烈なるMと、朴実にして率直無私のYと、空想情熱的の僕と、三人は其性格と向ふところとを異にしつつも、中心一点の共鳴緊は離れがたきものであつた。(当時OBは故山に帰臥して居つた頃である。)

三二年一二月に満二〇才になつた文八は、翌三三年正月に、幹部候補生として、近衛師団の麻布隊に入隊し、一二月に除隊した。その頃、一三期士官候補生として入隊した乃木勝典とも、一時期、勤務を共にしたことがあつたと言う。

勝典も、その頃の青年の一人として、さまざまな思想問題に苦悶するようになったのだろうか、その後父將軍が森鷗外に相談するようになったことは、鷗外全集におさめられた三七七年の書簡などからも想像される。

徳島県人尾花繁太郎との交遊は、すでに前章で、その一端を紹介したが、もう少し「生命の廢墟」から引用しよう。

むかし一つ橋の或校舎で、始めて逢つたときの彼は、既に早稲田で政治経済の学を修了し、其処に来て語学を専攻せんとするときであつた。教室の一隅に色の浅黒い瘠^やき形の眼の光つた青年が、授業の余暇常になにか書物をひもといて、他の仲間と最初は余り口もきかなかつたが、或日ふとした讀書のことから懇意になり、爾来学窓にあるの間、彼と僕とは刎頸^{なげ}の交りを結ぶにいたつた。

首席にて卒業後、或官衙に奉職したが、由来明敏にして思想の透徹せる彼が、どうして平凡なる俗物どもの輩^{やから}と伍して、生きた字引のような仕事に没頭出来ようや。その周囲には何等の自覚なき習俗的生活の奴隷^とのみで、彼等はただ器械のように己れを殺して動き、毎月の月給をとるのみが能事であつた。そうした空氣に愛想をつかした彼は、さらに他に、真面目なる人生の疑問に觸れて、とかく詩酒にその悶々をまぎらして居つたが、その間でも絶へず東西の哲理や藝術を涉獵して、思想の広野に彷徨^{ほうろう}をつづけたのである。ついにその逢着した人生觀の結果は、彼をして人事の無意味や学問の無価値を痛感せしめ、虚無の思想は驅^かつて故山の野人に終らしめんとした。

とある。文八は兵役で一年休学したが、尾花は三四年七月に卒業した。尾花が故郷に帰つたのは、三五年七月頃で、文八が「哀調」の原稿をまとめた頃で、外語を卒業した頃であつた。その後九月頃、長い長い手紙をよこしている。

……僕が衷心の交情を契れる諸兄と袖を分ちて郷国に旅立ちしは、猛夏漸く致らんとして満都の風物眠れるが如き時なりき。既にして三

四 三井物産時代

○三井物産に

明治三十五年二月六日、文八が臨川らに見送られて、大阪に向って出発したことは、すでに第一章にも書いた。

これより先、工兵中佐小島好問は、三十四年一月一八日、要塞戦用器材調査委員を命ぜられ、佛独兩國に派遣され、翌三十五年九月の末に帰国した。ロシヤの極東進出、築城などの状況を、裏面から探査する目的もあつて、製鉄会社、造船所などを視察してきたのである。

父が帰つて見ると、一人子の文八は、感傷的な文学青年になつて、来年は帝国大学の選科に入学したいと言つていた。日露の関係が火のついたような状態だったので、父は我が子の文弱を心配した。おりから軍の資材購入などで親しくなつていた三井物産重役の某氏と相談して、文八を大阪支店に勤務させることになつたのである。初任給二〇円、しばらくして二五円に昇給した。

文八の遺稿に、三井物産合名会社の原稿用紙に書いた、三十六年一月五日撰筆の「教育史研究摘要 未定稿」がある。これは草案であるから、いずれ上司に閲覽を受け浄書して提出した別本があつたものと思われる。

おもにマリー・コンウエイの原著によつたものらしい。結びに、(教育史の史的研究は刻下の急務なり。教育史の半面には、各時代の政治・社会的、宗教的国民生活の状態を映す。……)とあるように、これは学としての教育史研究ではなく、むしろ世界各国の教育・政治・社

会・宗教などの総合研究を目的としたものであつた。

当時イギリスは、インド・ビルマ・マレー地方を植民地化し、さらに手をのばして揚子江流域の経済を支配しつつあつた。またフランスは、安南地方(ベトナム三国)を植民地化し、イギリスと競合して、清国南部の政治経済をも支配しようとしていた。そして彼ら西欧人は、これら東洋諸民族の政治・社会・宗教などの歴史的研究にも力を注いでいた。それは、彼らの東洋支配を強化するために役だつていた。

後進国日本の貿易界の先駆者であつた商社三井にとつて、これら欧州列強と競合してゆくためには、世界の諸民族の研究は刻下の急務だつたのである。三井物産調査部の仕事は、これら欧州先進国の調査諸文献の研究からはじめられていたようである。

日清戦争以後、我国の紡績業は急速に發展し、大阪はその中心地となつていた。三井物産大阪支店は、対韓対清貿易を中心として、めざましい活躍を開始してしたのである。そしてその指揮者は、支店長飯田義一であつた。

明治三十六年四月には、大阪で第五回内国勸業博覧会が開催された。この博覧会は、国内の出品物のみならず、清国韓国からの特別出品もあり、さらにカナダをはじめ諸外国から製品を陳列した参考館を作るなど、かつてない盛大なものであつた。

天皇皇后両陛下もこの頃関西に行幸啓されていた。四月二〇日には天皇を迎えて開場式が行われ、七月三十一日までつづいた。その間、四月二〇日、二五日、二九日、五月一日と四回の行幸があつた。また四

月二四日、二六日、五月二日と三回の行啓があつた。

三月一日から会場の準備がはじめられたのであるが、その間三井物産大阪支店は、出品・陳列・装飾・販売などためまぐるしい日々がつづいたようである。もちろん文八も、そのために、かなりいそがしい日々を送つたものと思われる。

○ 文学青年たちからの手紙

しかし、三井物産がどんなにいそがしかろうと、若き文学青年文八にとつては、やはり退屈な日々であつたらしい。その頃東京の文学青年仲間から送られた二通の手紙が残つてゐる。

中澤臨川の手紙

久しく御無沙汰のみ致し居り、寔に申譯無之候。難わ江の春光、いかばかりか長閑なるもの有之候や。兄の御健康はいかに、兄の愁思はいかに。あはれ御閑暇の折もあらば、御作と共に示し賜はらずや。

小生は例によりて不平の塊のみ。毎日毎日いやいや乍らに、下らぬレッスンの奴となりて、何の取えもなく暮し居り候。時たまの暇には、古賢人の文繕きて、有難き教訓に接する事もあれ、それさへ日に

増しに発奮力の減減致し行くやうなる心地いたし、あはれ、心には、少しは尋常行路の人と異なるやう、との心願はあれ、この躰たらくには、是も覚束なきにやと心細き事のみ有之候。

同人は例により碌々乎たり、超々焉たり、愚の如く、賢の如く、まづ恐らく前者に近しと申すを至当と仕らんか。小生などは依然たる旧阿蒙。酒は相変らずりたるものに候。元日第一、蒲原君と酒に一

日を過して大氣焔のレースをなして以来、憤々たる愚俗の徒が、女共の膝下に眉をたれて、「逢見ての後の心に」ときはぎ居り候間、乃公は超然として長夜の宴に候。君なく誰もなし、何所にか適痛せん、という有様にて、噂に聞く独歩兄が、恋しくなり申し候。但し、近来は、少々酒の中毒にしてやられたる氣味にて、大ふさぎに候。

實は、「哀調」の評語を悉くあつめて、兄の所に送らんと存居候ひしが、今日は協はず遺憾に候。大に賛意を表はしたる者は小生の知る限にて「太陽」即興詩人、みをつくしと相並べて去年の三訳文といたし居り候。「二六新聞」(此評語は大に感謝の價値あり、何となれば兄が訳著の発意にふるるものあらんと存ぜられれば)。「中央公論」之は御送り申候。「早稲田学報」等、皆知己の言たるに近しと愚存いたし

候が、いかが。只輕薄なる冷語をはなちしものに「文庫」あり、如是文壇の陋劣漢(他にも大に理あり、小生の如きは、近日中に大にやりこめんかと覚悟いたし居り候)は、只言ふ所を言はしむるに如かず。「小天地」の評も賛辞なりしと記憶いたし居り候。

寂として兄の消息の近来何ぞ昂らざるや。好漢幸に、(アトキギレテとある。これは本間久雄氏所蔵。かね女史の寄送したものである。

文中の同人とは「山びこ」同人であろう。手紙によれば、文八や臨川は、当代の日本や世界を、世記末以来の愁うべき世相と考へてゐるのである。つまり愁思の同志である。同じような文学者として独歩と有明を尊敬してゐたようである。憤々は、みだらなさまであるが、こ

れは、小山内薫らの年少同人を評しているのである。

巖谷春生の手紙

酒風兄足下

昨、哀調に世紀の幽愁を訴へて騒壇の嶺頭に白雲をたなびかしめし君。今、牙籌を採て簿冊の裡に、生存の敵と対峙せらる。何等の轉變ぞや。

僕感殊に深し。しかも、君が忙遽に処して、パンに闘ふの故を以て、揮麗の詩筆を枉げらるる者にあらざる事も、僕固く信じて疑はざる処なり。願はくば、健在なれ。

僕由来凡骨。乃、適々過去の半生に一行の詩を有するの故に、紅情紫恨をもたらして遽かに世間を超脱し、今にして、敢て自ら僭して、方丈に香煙を薫ずるの寂をまなぶものにあらず。人は自然に生くると共に、亦社会に活動すべし。偏するは可ならず、狭きは更に採らず。是吾が信條なり、要諦也。惟ふに斯の如きは、現代の体制に於て、或は矛盾なるべし。然らば、吾將に、当來の半生、這の矛盾を一貫して、終始を求而己、深く殆むるを用ひざれ。

僕臘月の半より濱港の地に客たりき。擾々の巷、長く僕を容るるや否やは、蓋し疑問なり。今や冷かなる運命の手は、僕を翻弄して、この疑問を解決せしむるに急ならむとす。惟ふに今より数月を出でずして僕の境遇は一轉化を来さむや、唯まさに莫哀を高唱して進まん哉。詳細の消息は他日を挨てすべし。

今帰京して草蘆に在り、芳翰若し幸に裁すべきものあらば、願はくば東都に宛て玉へ。例に依て元園町を訪ふこと頗也。人や柏酒の酔ひ

未だ醒めず、適々炉辺に会談す。しかも吾兄去り、尾花氏往き、甲轉じ乙移りて、寥々人をして坐に晨星の嘆を發せしむ。彼の某等と会する時、座談の閑語は即是なり。僕元よりこれを拒斥する者にあらず。しかも哀念時に平ならざるものあるは何ぞや。人若し常識に中毒せるにあらざれば、蓋し幸也。……(以下略)

春生は巖谷小波の弟であつた。文八が兵役で一年休学したので、外語で同級生となり、親友の一人であつた。春生の仲介で小波門下の木曜会の人達とも文八は知りあいになつていた。この手紙は、二六年正月九日に書いた春生の手紙の前半である。

臘月とは一二月のことである。春生も商業見習をかねてしばらく横浜にでかけていたようである。後に三菱商事に入社しているからその関係かも知れない。

草蘆は父母の家、元園町は兄小波の家である。柏酒は柏葉酒で正月の祝酒である。小波の家に出かけて木曜会の連中と話をしても、文八や尾花繁太郎がいないので淋しいと言うのである。

以上二つの手紙でも想像されるように、大阪に移つた後も、文八の心は、同愁の文学青年たちの心とつながつていたのである。つづいて同じ二月頃きた尾花繁太郎の手紙の一節を引用しよう。

……(前略)それについても想ひ出さるるは樗牛の死である。渠が千里を遠しとせずして、海外赴在の唯一の友たる潮風と往復した文書を読んで見ると、今更に樗牛の面影が彷彿として、吾目の前に現れ

る様な気がする。

樽牛は其晩年に於て病苦のため、やや情操の平静を害せられ煩悶したらしいが、其死の瞬間に於ては、定めし嘲風の書信を懐にして、多少の満足を以て永眠したであらふ。けれども此二者をして、生前一度の機會を興へて會合せしめたら、どんなに渠等は嬉しかったであらふぞ。嘲風をして樽牛が臨牀の床に起たしむることが出来なかつたのは、奮に芥舟一人の憾ばかりではない。而して此事かなわすば、せめてもの心やりに、青年會館の追悼會の席上に、嘲風をして思ふ儘に、追悼哀悼の辞を演べしむることが出来たなら、定めし樽牛も草場の蔭から慍涙にくれたで在つたらふに、遂に此事さへもかなわす終りしは、何たる不幸の因縁であらふぞ。嘲風が今夏帰つたら、興津に到り夜毎に清見寺の鐘に亡友を追懐し、龍華寺の墓石に亡友を哭さんと言ふのも無理でない。僕は渠等の心事を想像して惆悵絶へ難き思をする。ああ此友情、即ち渠等二人者が、生存の意義としたる生命ではあるまいか。……（以下略）とある。

樽牛が死んだのは三五年二月二四日であったが、青年會館の追悼會は翌年の一月であつた。この手紙について、文八は、樽牛嘲風の交情に、彼は最も己れの信念に近きものを見出した。僕は澆季汨濁の世に、彼の如き心友の情誼に浴することの出来たのを、唯一の誇りとするに憚らない。と受けとめている。また、

其年櫻の花も散つて漸く青葉に近づいた時分、彼は故郷から其父の

要事を兼ねて、京阪地方の仙遊に出掛け、久し振りに僕の寓居を訪れた。まるで長く逢はなかつた恋人でも邂逅つたように、二人は抱擁せんばかりに歡喜して、互の胸の奥を語り合つたが、毎晩おそくまで談笑に夢中で、ときどき相方の笑ひが下の部屋まで響くのを聞き、下宿の主人が其睡じさに驚いたくらい楽しく其日を送つた。

丁度三六年の大阪博覽會で、僕も會社から其方の仕事に向けられて居たが、OBの來遊を機とし、店務を休んで共に京都に赴き、其頃京大法科に在學して居つたTの寓居、それは或高燥なる土地に建てられたホテルの個室らしき住居に、元氣の好い快男子の旧友を訪れ、三人は共に、毎日、今日は清水の青葉、明日は祇園の旗亭と、諸所を愉快に遊び廻り、随分時には、痛飲淋漓して狂態を演じたり、柳暗花明の巷に耽溺の放埒を擅まましたりして、心靈の苦悶や懷疑の彷徨も忘れて、心ゆくばかり享樂の限りを尽くした。（以下略）

注(1) 生命の廢墟 三二七頁

注(2) 「生命の廢墟」三二〇頁

○ 国木田独歩

この頃、文八が敬愛していた独歩が大阪に來た。国木田^{注(1)}獨歩全集第五卷、田村三治宛の書簡によると、四月二七日頃帰京しているから、大阪に來たのは、二〇日の開場式前後だろう。目的は「東洋画報」にのせる写真と記事のためだろう。その時文八は、大阪を案内して、現在の生活の味気なさを、独歩にうつつたえたらしい。（かね女史談）

蒲田泣菫の「国木田獨歩君」によると、

(前略)こんな雑誌の用事などで、始終書翰の往復は絶えず為てゐる

文だが、其後博覧會の大阪に開かれた三十六年の春かと思ふ、同君が遊覧旁西下して大阪に来られた事があつた。自分が面のあたり初めて言葉を交したは其時で、此の日は丁度、安土町の書籍商集會所で、文学同好會といった自分等同志の清會が催されて居たが、同君は、其頃シヤトブリアンの「ルネ」を譯された小島文八君と一諸に自分を訪ねられて、留守の者から斯會の事を聞かれたとかで、案内なしにつかづか

と出掛けて来られた。列席の諸同人の間で、顔馴染は唯ひとり角田浩々君のみで、他は皆自分と同じ様に生面の人であつたに拘らず、氣焰の高い獨歩君は、随分と無遠慮に声を振り揚げて、放談もすれば皮肉も言ふといった風で、主人役の方で少からず面喰つた人もあつたやうに覚えてゐる。其の翌日、君は自分の寓を訪問せられる約束があつたのに、急に用事が出来て神戸にゐられる令弟の北斗君を訪れられたと

かで、自分は一日待惚の目に會つた。そして其の翌日、君が自分を訪ねられた折には、嗟憎と自分は京都に出掛けてゐたので、それから引續いて再會の機も無く、文学同好會での初対面は、聽て最終の対面となつて了つたのである。

とあるが、これは泣菫の追憶談であつた。

そつ直な独歩らしい人がらがよく書かれてゐる。この時の独歩との出合いが縁となり、文八は、数ヶ月後、独歩からの電報で東京に呼び返されることになつた。金港堂の「婦人界」主筆の話で、月給五〇円、

その他に車代一五円の月手当がもちだされた。前任者は、独歩の親友齋藤弔花であつた。

明治四二年五月一日、「婦人界」が復活して、第二期の創刊号が出た時、弔花は「婦人界に餞す」の一文を寄せてゐる。それによると第一期「婦人界」は、弔花が初代主筆となつて、三四年四月に創刊したものであつた。そしてその文中に、

(前略)三六年、予は都會の生活を避けて田園に静居せんと思ひ立ち、最愛なる我「婦人界」と袂を分ちて、故山の人となり、その後任を友人小島洒風に托して、瓢然として天王山下の草廬の主人となりたる後も、閑あれば拙き文を綴りて寄書したり。偶、日露役の事あり、「婦人界」は不幸にして、その發展の前途を犠牲にして休刊するに至り。(後略)

とある。

三七年四月文八應召。しばらく、「文藝界」主筆佐々醒雪が、「婦人界」をも兼ねてゐたが、戦争の發展と、金港堂が教科書不正事件で受けた痛手とのために、第一期「婦人界」は休刊となつたのである。

注(1) 学習研究社版、昭42、

注(2) 「新小説」第十二年第八号・明治41・8・1

○ 時勢の動き

これより先、内国博覧會の頃、文八が、独歩に大阪における狐独の淋しさをうったえたり、親友尾花繁太郎と人生論をたたかわしたりしている頃、日本政府の最高首脳部たちは、対露政策について、大きな

苦悩と対決していた。三四年に日英同盟を結んで以来、日本の注目は北方にあった。シベリヤ鉄道を敷設し、満洲に大兵を送り、旅順を要塞化しつつあったロシアの動静は、元老たちをも不安にまきこんでいたのである。

^{注1)} 大博覧會を期として、天皇の関西行幸があり、神戸沖の観艦式が盛大に行われたので、日本の重臣たちは関西に集つてきた。三六年四月二三日、京都南禅寺の近くにあった山県の別荘無隣庵に、山県、伊藤、桂、小村の四人の重臣が集つて、最高秘密會議を開いている。ロシアとの開戦は必至かも知れないが、まだ当時の日本の戦備や国力では、必勝の自信がもてなかつたのである。だからその時は、何とかして、ロシアを満洲から撤兵させるために、最後の努力をしようと言う会機であつた。

七月二八日、外相小村寿太郎は、最後のとも思われる対露交渉を開始している。しかし希望はもてなかつた。そしてその頃になると、国内でも、帝大教授をはじめとして、陸海軍省の中堅幹部、外務省の中堅幹部を中心にして、対露開戦論が次第に高まりつつあつた。

陸軍省参謀本部長井口省吾少将は、陸軍の強硬論者の一人であつた。井口は、昔から小島工兵大佐と無二の親友であつた。八月一七日、小島大佐に独佛派遣の辞令が出た。これは参謀本部の開戦準備であつた。

文八が、独歩の電報を受けて東京に帰つて来た日は、父大佐が、アメリカを経て船出をする前日であつた。父にとつては、この非常時に、文学などは、無用の長物であつた。それに依頼した三井物産重役への

義理もあつた。独歩の意図については、父子ともにまだくわしくは知らなかつたので、父は子に熟慮するように、そして若し文学方面のことをやるのなら、義理もあるから、家を出てやれと言ひ残して出発したと言う。

父の反対はかなりきびしいものであつたが、親友中澤臨川は休暇で帰省してゐた。やむなく小山内薫や独歩と相談した結果、決意して

注(1) 「海は甦える」第二部参照江藤淳著昭51・4・15・文芸春秋社。「輸入税」

五 「婦人界」主筆時代

○ 周辺の人たち

父の嚴命にそむいたので、洒風はやむなく飯田橋近くの旅館の一室を借りて下宿した。「生命の廢墟」の末尾に、

此稿の最後が日露の頃に終つたため、その以前にさかのぼつて、當時愚鈍僕の如きを導いてくれた、先輩独歩や畏友臨川または藝陽たち、故人の上を偲ぶまでに及ばなかつたことを遺憾とする。僕が境遇の變轉は、これら故人との交情を疎遠にして、遂にその生前再び相會して、旧關を叙する機なからしめた。今、僕は此稿をとづるに際し、謹んで彼等の靈に謝す。

とあり、またその三二八頁に

(前略) 其前年の秋には、牙籌を抛つて僕は東都に歸り、未熟なる理想の片鱗を描くべく、故人独歩の推奨により、或大書肆の仕事に關係して居て、翌年の春其所から戦時の召集に應じたのである。(後略) とあるのみで、その頃のことは、これ以上のことは、「生命の廢墟」からは知ることができない。

しかし、国木田獨歩全集第十卷別冊の寫真帖には、この頃を偲ばせる二葉の寫真が残っている。44—204龍土會寄書と45—211龍土會寄書である。二葉とも龍土會寄書となっているが、龍土軒寄書とした方が正しいであろう。二葉とも洒風(婦人界主筆)が主人(招待役)で、他は客人である。場所は龍土軒である。21の方は明治三六年の秋(涙洒西風泣斷腸の句が秋を語つてゐる)である。204の方は明治三七年の春

である。崇拜女学生は成女女学校の学生で、後のかね未亡人である。

三六年の秋の寄書は、国木田独歩・蒲原有明・中澤臨川・小山内薫・平塚篤・武林無想庵と主人役の小島洒風である。三七年春の寄書は独歩・有明・臨川の三人と主人役の洒風であつた。独歩と有明は先輩、臨川は同輩この三人が正客で他の薫・篤・無想庵はとりまき連中と考えていたようである。(かね未亡人の話参照)

この外にも、弔花や正岡芸陽などもいたようであるが、もつとも親しかつたのは、独歩・有明・臨川らと、とりまきの薫・篤らであろう。しかしこの頃のことは、もつと具体的に知ろうとすれば、彼自身が主筆として編集した「婦人界」そのものを中心にして論ずる方が正しいであろう。

注(1) 「生命の廢墟」四百頁

注(2) 学習研究社刊 昭42・9・10

○ 「婦人界」第二卷第六号(明36・10・1)
九月一日号も洒風が弔花の意図を汲んで編集したものであるが、この十月号は彼の手になつたものである。その目次を見ると、

目次

挿畫 — 秋—女学生鑑—勞働(ミレー筆) — 名門の家庭—英國婦人遊戯

— 幽寂—東京女醫学校卒業生 — 今井慶松氏

西畫解題

小島 酒生

米國婦人の自活法

吉川 曾水

婦人界

佛國の女學校

原田 秋浦

評論數則

社交數則(二)

某貴顯夫人談

愛調

文目 文學

中澤 臨川

講壇

ポール・エ・ヴイルジュ

新保 一村

婦人と娯樂

雨夜品定軒の零

津の守山人

家庭に於けるユーゴー

俳諧玉藻集講義

茅原 壽々子

女の大事

主婦の世界

水 仕 女

家庭養鶏談(二)

簡易な涎掛

くれがし

兒童の栞

紅と白粉

職業案内

兒童衛生に就て

婦人新聞記者

柳 葉

育兒瑣談

小笠原島の歸化婦人

塩津 好行

ままごと

最近の婦人會

A H 生

人物月旦

流 行

主婦の心得(縣賞発表)

矢島樺子

報

中村 きく子

史 傳

女流畫家 ロンナー女史

和 田 操

家庭科學

電氣鐵道の話

小林 與津子

染色學會(續き)

若目田 利助

猪原 吉三郎

社 會

猪原 吉三郎

猪原 吉三郎

附 録

小説 歌

田 山 花 袋

女學生鑑(其一)

以上の中で「西畫解題」「婦人界」「愛調」「彙報」「女學生鑑」

の欄は洒風が書いたものであろう。挿畫中の「名門の家庭」は、一五代將軍徳川慶喜が大ぜいの子女に囲まれた写真であるが、旧幕臣の子弟であることを誇りとする意識が洒風の心裏を流れていたのではあるまいか。

評論數則は、「理想的細君」「人生の清泉」「低く生き、高く思ふ」「文學上に於ける女子の地位」「女子の文章」「女子の服装」「主婦と下婢」「黒潮及まだ見ぬ親」の八章に別れている。すべて洒風の筆になったものであるが、「黒潮及まだ見ぬ親」を引用して見よう。

黒潮は人道と愛とを教へんとする福音の小説で、まだ見ぬ親は人格と愛とを示す光明の物語である。

愛の教訓、愛の道義、愛の感化、愛の慰藉、記者は歡喜祝福して、この二書を江湖に推薦するのである。

「黒潮」は洒風の尊敬する徳富蘆花の作であった。三五年中「国民新聞」に連載されていたが、当時蘆花は、兄蘇峰と思想的に対立したため、三六年一月二一日、兄に告別文を送り、二月の末に、「黒潮」

第一巻として自費出版したものであった。

その告別文の一節には、「君は國力の膨脹に重きを置きて、帝國主義を執り、余はユーゴー・トルストイ・ゾラ諸大人の流を汲んで人道の大義を執り、自家の社會主義を執る。云々」とある。これが當時有名になつていたのである。^{注1}「追はれる魂」から引用しよう。

健次郎としては、逗子の老父母がどうおもおうと、ここではつきり兄と手を切るほかになかつた。かれは無理工面をして、「黒潮」第一巻を自費出版して、かれとしては生れてはじめて獨立獨歩の氣分を味わうのであつた。「黒潮」は案外評判がよかつた。小説は別としても、巻頭の告別の辞が世論をわき立たせた。二月の末に本になつて、四月までに七千部から賣れた。原宿百七十番地の邸宅をそのまま黒潮社にして作者は、本屋からの仕込みと一冊買の客の應對にてんてこ舞いをして暮らした。大隈伯から、こつそり書生を一冊買いによこされたり、島田三郎が匿名で慶賀のハガキをくれたり、大町桂月が「太陽」で「どつちを助ける?」と書いて弟の肩をもつたり、大阪のクリスト教會の重鎮である宮川經輝牧師は日曜の説教に告別の辞を朗讀したりした。別所梅之助の手紙。内村鑑三の激勵の手紙。木下尚江の毎日新聞の論評。逗子の父からさえも「御祝儀、黒潮社」として一円紙幣が一枚おくれた。世論はひどく弟に味方した。健次郎は三十五年目に、とうとう兄にたいする復讐をなすとげた。(略)

「黒潮」の主人公東三郎は、当時明治二〇年五七才。旧幕府の旗本。

蘭学の教養もあり、公武合体のもとに、將軍慶喜を中心に文明開化を夢みていたのである。それが山内容堂、後藤象二郎らにはかられ、薩長に策動され、一朝にして賊臣にされ、抵抗むなく明治を迎えた志士であった。この三郎の批判の目をかりて、薩長藩閥政治の偽善と虚栄をついた小説であった。その点では、文八は無条件で賛成だった。それに蘆花が、兄の軍国主義に反対して独立したのも賛成だった。文八も父に對立して文学のために家を出たからである。それに蘆花がトルストイに傾倒しているのも同感であった。当時の文八にとって、蘆花は同志の先覚者だったのである。

また「愛調」欄は、文八が新設した欄であった。「愛神パンヂァン」「涙」「秋郊一路」「座右銘」「愛」の五章からなっている。そのうち「愛」の章を引用しよう。

われらの世界は愛の世界なり。われらの天地は愛の天地なり。われらは愛に生れ、愛に活き、愛に死ななことを希望す。母の愛、妻の愛、姉妹の愛、友の愛、これを廣く云へば、人生の愛！愛あるが故に人生に光あり。愛あるが故に人間に涙あり。愛するとき人の心清く、愛するとき人の心平和なり。清ければ罪悪なく、平和なれば悔恨なし。愛なき教育は木偶教育なり。愛なき家庭は呼吸せる墳墓なり。愛を解せずして道義を口にする、果して何ものぞ。愛を索めずして利を求むる、人生の値、何処にか存する。

愛はわれらの權威なり。愛は我等の信仰なり。われら教へんとするときまづ愛す。愛の天地を出でずしてわれらは歩まじ。愛の世界を出

でずしてわれらは語らじ。愛に立ち、愛に行き、愛に息ふ。われらは愛の謳歌者なり。

且愛し、且哀しみうるものは、幸なり。人はこの二つの光によらずんば、眞理をみる能はず（ユーゴー）

これによつて主筆洒風の主張を知ることができる。後年彼も反省しているように、これは未熟なる理想の一端だったかも知れない。しかし世間では、日露開戦論が嵐のように高まっていたのである。その中であつて、彼は必死になつて、愛と平和を提唱したのである。

なお洒風は、「彙報」欄の末尾で「愛讀諸姉よ、続々本紙に関する批評及記者に對する注文を遠慮なく御投稿あれ、記者は謹んで諸姉の愛顧に酬ひん。」と呼びかけて、「讀者より記者へ」の項を充実させようとしている。その二、三を拾つて見よう。

第二巻第六号（36・10・1）から

(1) △記者様に一寸申上げます。妾は信濃の片田舎に妹を相手に何を致すとも無く暮して居る不束の者でありますが、毎号本誌を愛讀して、お友達とも先生とも思ひ、いつもいつも発行の日を待遠うしく思ひまして、態々二里もある町へ出ては、一先にお買つてまゐる様な者でござります。承れば今度記者様がおかわりなされましたの事、何うか新らしい記者さん、妾の様な愚かな者をお教へ下さい。お救ひ下さい。御思召の程は、かねて御入社の辞で、ほのかに承りましたが、何うか何時までも、あの御精神で、数多い妾のやうな者どもの為めに、暖い愛の福音をお傳へ下さい。（信濃・みか子）

(2) △記者様にお願いたしますが、何うか妾達の為にめ、毎号新体詩の御講義を掲載して下さいませんか。(東京・末松信子)

(3) △ああおもへば、妾ほど果敢ないものはありませんわ。幼い時分、大切な父さまにおわかれ申してからは、ただひとりのおなつかしい母上をたよりとして、寂しい寂しい人生に、哀しい旅路をつづけてをりましたが、その光とも灯とも思てをりました母さまが、去年の冬の木枯吹きすさぶ黄昏の庭に、落ちくる梧の一葉ともろとも、とこしへの眠につきたまひて、妾は天涯の孤客とも汀の捨小舟とも申すようなる悲しい身の上となりましたが、幸にも、聖經のみめぐみにあづかりまして、無限無際なる上帝の愛にすがり、他人の家に寄食する身のたよりなきさまも朝夕の祈禱ややさしい友だちの慰に、かけて加へて人生のまことの光をみとむることが出来ましたのは、あなになたる祝福の尚きことよと、そぞろに小さい胸のうちに、温い春の曙の花のおもいをいたしてをります。どうかどうか、この上にも婦人界記者さまの御主義と遊ばされる愛の福音を傳へたまふて、まことの歡喜と平和とを、妾等と同じ境遇のようなる諸姉たちへ、おあたへくださりますようお願いがひ申します。(巢鴨・靜子)

(4) △婦人界愛讀者の會を毎月一回お開きなすつてはどうです。なんなら私たち奔走いたしますわ。(牛込区・すみ子)

投書(1)(3)に呼應するかのようには、十月号には、前にも引用したように、「愛調」欄がつくられ、洒風は愛を強調している。また投書(2)に應じて、後に新体詩の欄が設けられ、また(4)に應じて、名士を呼んで

愛讀者の會が東京でひらかれるようになった。

またこの十月号には、「兒童の榮」に、国木田治子の書いた「ままたごと」がのつている。これは治子の書いた最初の小説だろう。子供の心理が軽妙なタッチで書かれている。「小説欄」の花袋の「唱歌」が、いつもの感傷に流れた小説なので、むしろこの治子の作が清新なように思われる。

小杉未醒の「獨歩氏の一面」に、

治子夫人が小説を書き初められた時のことである。僕が行つて一緒に酒を飲んで居ると、氏は夫人に出て来て酌をしると云はれる。すると夫人は、今本屋から原稿をとりに来て急いで居ますからと云はれる。氏は直ぐに罵倒を始めた。「お前達の小説が何になるのだ。それより客をもてなす方が、女の仕事ぢやないか。」と云はれる。それから、「只ありのままを描け、女には作るやうな力はない。ありのままに書けばやや見られるものが出来やう。」と云つた。そして婦人の作などは愚劣だと見向きもしなかつた。寧ろ罵倒のみされたのである。世間では夫人の小説は氏が添作するのだらうと云つた人もあるが、途方もない噂である。

夫人の小説にも警句があつて中々面白い。氏は東京生抜の人間は警句が想像以上にうまいと云つて感心されたことがある。

とある。

独歩らしい罵倒が面白い。彼にはてれ屋の一面がある。罵倒によつ

(以下略)

て愛情を告白しているのである。未醒の話は、彼が獨歩と親しくなつた明治三十七年九月頃の話だろう。「ままごと」は治子の処女作であろう。獨歩が治子に、「ありのまま見たままに書け」と指導していたと言うが、そう言えば、「ままごと」は、たしかに子供の生感をよくみていた者の作であり、母親らしい觀察である。てれ屋の獨歩は、花袋と並べて「小説欄」には入れさせないで、「兒童の棗」欄に入れるように依頼したのである。獨歩と洒風の親しさが、それをさせたのである。こうして治子夫人の処女作が世に出たのである。

洒風にも未発表の遺作、「美しい皇子の母」(印度御伽話)がある。原稿が集まらなかつた時の埋草にと書いておいたのだろう。

前にも書いた獨歩寫眞帖の45―211の龍土軒寄書はこの頃のものであろう。「婦人界」編集にあたって、洒風が助言や共力を仰いだ人々を一夕招待したのである。主人の「洒風太俗」は、従来の書生らしい固苦しさを捨て、清濁あわせ呑む大主筆になろうとする意気込みの象徴だろう。「涙洒西風、泣断腸」は、洒風と西風をおりこんだ洒落句である。西風は秋の気節を示している。客の「古今獨歩・国北生」は、獨歩らしい快気炎が聞えるようである。「十五初髪わがくる髪の艶にはこれか町の塵・ありあけ」、「臨川嘆逝水・野迷迷人」、「行きはよい／＼帰りはこわい朝の鳥と夕からす・なでし子」、「小人不飲・いはを」、「鶯がすむ月波の山のやま男・あつし」、有明、臨川、薰、無想庵、篤と、それぞれのその頃の心境が表現されている。

注(1)「追はれる魂」前田河廣一郎 昭和23・8・31 月曜書房刊

注(2)「新潮」國木田獨歩号(明治41・7・18)

○ 第二卷第八号(明治36・12・1)の頃

まず彙報の読者の投書から拾つて見よう。

(1)△主筆小島様へ御願ひ申しますが、私に男の友達があつたの、其の友達は非常に婦人界を愛讀して居る者でありますが、投稿する事も出来ないし愛讀の會へ列する事も出来ないつてござしてしまいました、會等へ有志の男子等入會させて男女交際を致し度い者ですわね。小島様や愛讀の諸姉に御異存なくつて？無ければ早速さうして頂きたいのよ！

(2)△讀者の會を毎月土曜日の午後あたりから開いて、主筆先生にも何かお話を願へますまいか。場所は何所でも宜しうムりますから、其の日は皆んなで楽しく遊ぼうではムりませんか。御同感の御方は何うか本欄へ。(本郷森川町・西原)

(3)△主筆小島様の御住所は何地でムりますか。大抵毎日何時頃は御在宅で居らつしやいますか。酷だ御手数数様ですが、何うかお教へ下さい。(牛込仲町・I・I)

△I・I氏に、小島氏の住所は牛込加賀町二丁目二十四番地、鳥居大路氏内でありますが、御用の御方は、午後は大抵金港堂に居りますから何うか同所へ。又自宅には毎日曜並びに一月十五日の午前は大抵在宅して居られるさうです。

この頃になると投書がどんどん増えてさばききれなくなつたようである。一何分にも澤山の御たよりで、本号にはとても載せ切れませ

ぬから残念ながら大半は次号に記者の御答へと一所に掲げることになりました。何うか悪しからず。記者」とある。真面目な投書が、どんどん増えているが、今は、異色の投書三べんのみを引用したのである。すでに、晶子の「みだれ髪」も出版され、小山内薫らが恋愛にうつつを抜かしている時代であるから、こんな投書がくるのも自然かも知れない。有名人を講師にして愛読者の會をひらいても、主筆はあくまでも司會者であった。彼女たちは有名人よりも、むしろ主筆と直接話しかかったのである。洒風が貴公子で、たくましい好男子だったからである。

投書①は無記名である。これは愛読者の會に集った若い女性たちの意見を代表したつもりであろう。投書②は、洒風を囲む會を毎月開いてほしいと言うのである。投書③は直接洒風としんみり話したいと言うのである。鳥居大路は親友の家である。直接下宿におしかけられることを避けたのである。投書に対しては、真面目に答えるが、態度はくずさなかつたのである。これは彼の生れつきの性格であつた。

小山内薫なども、妹の八千代を、ひそかに洒風にと思つていたようである。「むさうあん物語」32によると、はじめ薫は、妹を生田葵山にやつてもよいとおはせていたのが、この頃になつて葵山を拒否するようになったので、葵山が無想庵に歎いた話を書いてある。

(前略)それは、小山内やわたしがまだ一高生だつたころ、小山内薫の才能をみとめ、その譯詩「シェリー」の詩の一節を、「活文壇」

へ採用したりした時代、小山内とある月の晩、新見付の土手を散歩し

ながら、—自分はどんなに高い地位や、金持から妹をもらいにくても、ぜつたいにやらないつもりだ。しかしどんな貧乏でもいいから天才のある詩人にやる考えだ—と、小山内は、いかにも生田葵山にあてはめたようなものいいかたをして、葵山をよろこばせたことがありましたが、さいきん地位ができて家庭をもつ必要をかんじた生田葵山が、そのときの言葉を思い出して、小山内薫に妹八千代をくれないかと申し出たところ、—自分は、どんな天才があるうと、びんぼうな詩人や小説家には、ぜつたいに妹はやれない、—とけんもほろろにつつばねた挨拶に、カツとのぼせ上つて、前記「婦人界」の短編を、一氣呵成にかいたいきさつを、こまごまと物語つきかせるのでした。(略)文中の「活文壇」は三年一月、小波門下の木曜會の人々が中心になつて創刊したものであり、葵山は編集の中心人物だつた。その「活文壇」に、薫の訳詩を採集したので若き薫が感激したのである。そしてこの話は三十七年一月頃のものであろう。なお、無想庵物語はつづいている。

「婦人界」というのは、そのころ佐々醒雪の主幹する金港堂の大きな綜合雑誌「文藝界」とならんで出ていた、やはり金港堂の婦人雑誌でした。「文藝界」には、そのころ金港堂の懸賞小説に二等をかちえた「地獄の花」の著者、洋行前の永井荷風が、しきりにゾラばりの小説をかいたり、また國木田独歩が、鎌倉からかき送つた「酒中日記」などがのつたものですが、「婦人界」は、國木田独歩の親友のひとりである、小島洒風が主幹していました。

洒風は、麴町の大妻女学校の國語の先生で、小山内八千代はその教
え子のひとりでした。小山内八千代は、兄薫よりひとあしききに文壇
にデビューしたのは、この洒風の肝いりだったかも知れません。

例のダブルラッパの蓄音機を、小山内薫がかるた會の余興に自宅へ
持ちこんだ晩、小島洒風は、余興のおわりに、志願兵中尉の軍服姿で
すくつと立ち上ると、外語じこみのフランス語で、とうとうと、シャ
トブリアンだか、ラマルチンだかを暗誦して、みんなを煙にまいてい
ました。

その晩、琴を所望された八千代女史は、はれがましく人まえで弾く
のはいやだといって、つぎの間から、今井慶松じこみの「嵯峨の秋」
をきかせました。つづいて小山内薫とわたしが、尾崎紅葉がモリエ
ールの名のもとに抄訳した「夏小袖」を朗讀した。(略)
とある。

これで見ると、三七年正月、小山内家の正客は、どうやら「婦人界」
主筆の洒風だったようである。八千代をはじめ皆から、先生として厚
くもてなされていたのである。しかし無想庵のこの追憶話には、二三
の間違いがある。洒風はまだ少尉であったし、八千代は三二年麴町に
創設された「成女学校」の第一回の卒業生だったが、その頃は専攻科
に席をおいていた。そして洒風は、この一月から成女学校の國語の先
生になる予定だったのである。どこかの新年の祝賀式に参列して、そ
のままの軍服姿で小山内家を訪問したのであった。

これより先、三六年一二月の「婦人界」「詞藻」欄で、洒風は新刊

紹介として、「この花」第四巻を紹介した。

これは成女学校の機関雑誌とも見るべきものにて、女生徒並に卒業生
諸氏の美文韻文とりどりに趣きあり、就中、小山内八千代女史、世良
せん子、福原花子、鈴木いの子、向後その子氏らの作物は、優に文壇
に紹介して聊も遜色なかるべく、総じて高等女学校程度の生徒が文才
としては、我邦まれに見るものとも謂ひつ可きか。(定價二十銭 麴
町区下二番町・成女学校内・この花會発行)

ここで八千代の文才を激賞している。同じ「婦人界」の「新體詩」
欄には、薫の詩「人形」がのせられているが、これはつまらない詩で
あった。当時洒風は薫よりも八千代を高く評價していたのである。し
かし結婚するには、母や兄薫の素行や風評に、小島家のプライドと合
わないものがあつた。

○「婦人界」第三卷第三号(明治37・3・1)の頃

三七年一月五日には、日露の国交が緊迫したので、軍事事項の新聞
雑誌掲載禁止の緊急内務省令が公布され、二月十日には宣戦の詔勅が
布告された。第三卷第三号は、このような時代を背景として編集され
たものであるが、これが洒風によって出された最後の雑誌となった。
彼が應召したからである。

口繪

大元帥陛下

露國皇帝陛下

默想

帝國軍艦乗組員

丁抹皇室の訪問者

平和の春

毛筆畫手本(梶田半吉筆)

目次

評論

戦争と婦人

講壇

女性と宗教

将来に於ける慈善事業

特別寄書

修養小話

戦塵

月下の奈翁

ブレンハイムの戦

婦人雑俎

婦人叢談

婦人の修養

婦人の領分

結婚問題

研究(二)

女子の職業

電話交換手

家庭の讀物

母の心得

家庭の讀物

家庭の讀物

看護婦史談

容姿と流行

春の流行

女の容姿

家庭科學

染色學會

家庭園藝

女禮一般

茶湯と活花

料

古式正統料理

家庭衛生談叢

人物月旦

鈴木秋子

錦港生

白木屋呉服店員談

K Y 子

猪原吉三郎

花朗生

閑松庵

生

正起

新保一村

大鳥居古城

讀書子

大鳥居古城

奥原晴湖女士
最近の婦人界

時局と婦人

征露軍歌

懸賞文披露

各女學校入學案内

附 録

姪人形

生 田 葵 山

となつてゐる。

これが開戦直後の「婦人界」三月号であつた。第二次大戦頃の新聞雑誌の狂乱ぶりに比較して、その冷靜な編集ぶりに私は驚いたのである。口繪には、「大元師陛下」と「露國皇帝陛下」の写真が、頁をかえてではあるが掲載されている。そして日本の宣戰詔勅の外に、これも頁を変えて露國の宣戰詔勅が大きくのせられている。

井上全權公使電報

伯林発 二月十一日
東京着 二月十二日

二月十日公示せられたる露國皇帝の詔勅は左の如し。

朕が忠實なる臣民に左の事を宣す。

朕が旨とする平和を維持するの目的を以て、朕は東洋に於て靜謐を鞏固ならしむに全力を盡したり。此の平和の目的を以て、朕は韓國の事體に關し、兩帝國の間に現在する協約を改訂せんとの日本政府の提議に對し同意を與へたり。然るに該問題に付き開かれたる商議は未だ終了せざるに、日本は朕が政府の最近の回答に於て為したる提議に接するをも待たずして、露國との商議及び外交關係の断絶を知照し來り。

此外交關係の断絶は、即軍事行動の開始を意味するとの予告を與ふることなくして、日本政府は、其水雷艇をして旅順口砲壘の外側に在りたる、朕が艦隊を突然襲撃せしめたり。朕が大守より此報告に接するや、朕は直に干戈を以て日本の挑戦に應ずべきを命じたり。朕は此決意を爲すに當り、深く上帝の救護を祈り、朕の臣民が其祖國を防護するが爲、皆齊しく趨りて朕の命に赴くを疑はず。

朕は偏に朕の名譽ある陸海軍に上帝の加護を祈る。

とある。もちろん洒風は露國の主張をそのまま肯定しているのではない。しかし前にも書いたように蘆花と同じく平和論者であつた。彼はできるだけ冷靜であろうとし、報道の客觀的態度を守ろうとしたのである。

目次を見ると、洒風は評論欄に「戦争と婦人」を、また戦塵欄に「月下の奈翁」を書いてゐる。しかし残念なことには、私の手許にある洒風所藏本では、その部分が破棄されている。後年彼自身が破り捨てたのだろうか。

戦塵欄の「ブレンハイムの戦」の後半が残っている。しかしそれは、明らかに戦争に對する批判的説話であつた。

六

カスバル老人は再び説きぬ。「此所で佛蘭西の兵を負かして大勝利を得たのは英吉利ぢやつた。が何の爲に互に殺し合ったかといふ事は今私には言へぬ。けれども其の戦が有名な大勝利ぢやつたと丈は誰でも皆んな謂つてゐる。」

七

「恰度其の戦のあつた時分、私の父はブレンハイムに住まつてゐた。そら彼の向ふの流に沿ふてゐる、あれぢや。彼所に住んでゐた父らは自分から小家に火を掛けて逃げ出さなきゃならん事になつた。行先も目的も何んにもなく、妻や小供を連れて只々逃げ出したものぢや。」

八

「火だの劔だので田舎は滅茶々に荒されて、澤山の母や生れた許りの赤兒は皆んな死んで了うた。がお前達も知つて居やうが、有名な勝利とも云はれる戦には、必と其様な事が伴隨して居るものぢやて。」

九

「それで田舎が荒され、後の光景の凄さはなかなかで、澤山の死骸が彼方此方、太陽に曝され、腐つて、ごろごろと轉がつて居た。が知つての通り、有名な勝ち軍の跡には、必と其様なものが澤山無けねばならぬのぢや。」

原作は、「サウシー」。訳者は寒潮となつて居るが、きいたことのない名である。洒風の匿名であろう。トルストイ流の平和主義に立つて、戦争の悲惨を説いて居るのである。日露の戦争は、仁川沖、旅順港外などの海戦ばかりで、黒木大將の第一軍はすでに編成されたが、まだ敵前上陸の機を伺つて居た。洒風は悲惨な戦争にならないようにと心から祈つて居たのであろう。

横井忠直らの「征露軍歌」など、戦争関係の記事をものせてはいる

が、「婦人界」三月号の主潮は、講壇の「女性と宗教」、一將來に於ける慈善事業」や、特別寄書の「修養小話」にも見られるように、宗教・慈善・修養など、人間の本質は愛であるという洒風の基本姿勢は変わらなかつたのである。

二月十日近衛・第二・第二の三師団をもつて第一軍が編成されることゝがきまつた。しかし彼は所属部隊の近衛師団の戦時編成からはずされて居た。彼の叔父藤堂紫朗は早くから陸軍情報局の顧問になつて居た。二月二一日俘虜情報局が設置され、二月二七日陸軍少将石本新六が俘虜情報局長官に任命された。洒風はこの情報局要員に残されて居たのである。叔父藤堂のはからいであろう。

三月ともなると、彼は靜かに召集の日を待つ身になつたのである。獨歩寫眞帖44―20龍土軒寄書はこの頃のものであろう。この時洒風は三人の親友に、召集の近いことと愛人のできたことを告白したのである。それは教え子、成女学校四年生、卒業学年の朝倉かねであつた。

その話をきいて、獨歩は毒舌でひやかしたので寄書には「毒哺生」と書いた。有明は崇拜女学生の大きな繪をかき、その傍にうらやましう男を書いて有明と署名した。臨川は電車の上でELEVATION（高圧）と書いた。そして主人は洒風馬方と書いた。その日の楽しかつた快談ぶりが想像される。

朝倉かねは後のかね夫人であるが、この話は、いづれ後の章で詳しくのべることにしよう。洒風が成女の講師に就任したのが一月で、三月にはすでに候補者をきめて居たのである。随分手早い話である。

高松短期大学研究紀要

第 7 号

昭和52年3月1日印刷

昭和52年3月10日発行

編集発行 高松短期大学
〒761-01 高松市春日町 960

印刷 新日本印刷株式会社
高松市木太町 2158